

P26b 星形成領域 S106 におけるチャンドラ X 線源の特性

坪井 陽子 (中央大理工)、大朝 由美子 (NASDA)、前田 良知 (ISAS)、古屋 玲 (Caltech)、田村 元秀 (国立天文台)

S106 は若い大質量星 S106 IR などを含む距離約 600pc に位置するクラスターの星形成領域である。我々はこの領域を 45ks の積分時間で X 線天文衛星チャンドラを用いて観測した。2002 年秋期年会 (坪井他) では 100 個以上の X 線源を検出したことを報告したが、他波長との対応があまりつかないことが問題であった。今回、「すばる」で得られた近赤外線データと詳細に比較したので、その結果を報告する。チャンドラの持つ約 17 分 × 17 分の視野のうち、すばるの視野は中心部の約 5 分 × 5 分。このすばる視野内にチャンドラのソースは約 90 天体含まれていたが、約 20 等の限界等級で検出されている赤外線源と比べることにより、初めて 95% 以上を同定することができた。本講演では近赤外観測から求められている進化段階、質量などにより、X 線の時間変動、スペクトルがどのように変わるかを議論する。また現在進めている VLA で取得した 8 GHz 電波連続波データとの比較についても論ずる。